

外へのまなざしと内へのまなざし

会長理事 庄司興吉

まえおき

今日は「外へのまなざしと内へのまなざし」ということで、お話しさせていただきます。

前回の理事会から二ヶ月余りたっていますが、この間、インフルエンザの影響で打撃を受けた会員もあるかと思います。しかし、土地建物使用料問題では、Y大をはじめ頑張っていると聞いています。そんななか、多くの会員生協では、総代会を開き、これまでの総括を行って、これからの方針を決めていることと思います。

私の方からは二点、本づくりと最近の海外出張について、お話しさせていただきます。

1 この3年余の反省

私が会長に就任した当初、このような形で理事会でお話しすることは考えてはいませんでした。しかし、録音をしたものに手を入れて返すようにとのことで、やっているあいだに自ずと流れができてきたので、ある時期からはある程度まで意識して起こしの直しをやってきました。

それらを今年になって見直してみたところ、予想以上の分量があり、そのなかからとりあえずは主要なものを選んで、一冊の本を作っておくのが良いのではないかと考えました。本の構想は資料に出ているとおりです。

この4年間の流れ・インタビュー・ビジョンとアクションプランづくり

まず、就任時の挨拶と、3回の全国総会での挨拶を並べてみたら、それなりにこの4年近くの流れがわかり、大学生協にかんする私の主張も出るので、これを第Ⅰ章にしてみましたらどうかと思いました。

つぎに、就任してまもなく広報責任者のインタビューを受けましたが、その起こしに手を入れたものを見直してみると、私自身最初から生協の活動家ではなかったので、一般の学生や教職員がどう生協を見ていて、どう生協にかかわってくるかがわかります。一つの良い例なのではないかと思い、第Ⅱ章に持ってくることにしました。

それから、ビジョンとアクションプランを副会長から会長になる時期に作ったわけですが、前回のものを見直しながら、ビジョンとアクションプランを作る意義について考え、協同・協力・自立・参加という4つのシンボルに集約される大学生協のあり方を引き出していきます。この過程を、ビジョンとアクションプランを作った年の理事長・専務理事セミナーでお話ししました。それを出しておく、ビジョンとアクションプランを読むさいの理解が深まると思い、第Ⅲ章に持ってきました。

理事会での挨拶にもこの4年間の発展が

そのあとは理事会での挨拶です。1年目は「時代を読み、自分を変える」というテーマで、いくつかの問題を取りあげました。それらを並べて流れをつくったのが第Ⅳ章。2年目は、ビジョンとアクションプランができましたので、それをふまえ「協同・協力・自立・参加の好循環を！」というテーマで、いくつかの話題を取りあげています。それらを並べて流れを出したのが第Ⅴ章。

3年目以降、世界が危機と変革の時代に入りましたので、「危機と変革の時代に入った世界のなかの大学生協」がテーマです。昨年のはじめにはまだ予想できなかったのですが、秋のアメリカ大統領選挙でアフリカ系のオバマが選ばれました。

私はかつて、1960年代のアメリカの大変動はどうなるのかということで、70年代の半ばにアメリカに行き、アメリカ中を走り回っているいろいろな人に会い、インタビュー調査をしたことがあります。その頃からずっと気にしていたことが、40・50年かけてようやく実現し、大きな流れで見ると明らかに世界は変革期に入りました。

そういう流れのなかで大学生協をどう見るか、というテーマです。予測できていたわけではありませんが、いろいろな機会に話したことを並べてみると、それなりの流れができていることがわかりました。そこで、未来に向かって視野を開いたうえで、これまでのものをまとめておくという形で、本を出してみようと思ったわけです。

大学生協連の企画・製作による出版

公的な場での発言をもとにしているの、和田専務はじめ役員室の諸君とも相談し、どのように出版したらよいかを検討しました。私が自分の流儀で出版すると、この手の本は三千円くらいの定価になってしまいます。普及という観点から、もっと安い価格で出せばその方がよいということになり、大学生協連の企画編集で出すことになりました。

その校正で追われておりまして、この理事会挨拶の原稿もぎりぎり間に合ったところです。私にとっては、これは、自分の社会学のアプリケーションです。大学生協について私がどう考えているかを示すとともに、私が長くやってきた社会学という学問を、一市民の立場から実際に生かすようになるかを示している。

生協の活動も一市民の活動の一つです。この本をきっかけにして、もっといろいろな分野で活躍している市民たちに、自分の学問を使ってもらいにはどうしたらよいかを考え始めています。そういう意味で、大学生協連の宣伝と学習の資料になるだけでなく、私自身の社会学の展開にもなるので、出させていただくことになりました。

2 タイとインドネシアの大学生協

つぎに、7月に入って、タイとインドネシアの大学生協の会議に出席してきました。その結果について、大きく3つのことをお話しさせていただきます。

日本の大学生協への関心

一つは、アジアの大学に関係する生協で、日本の大学生協への関心がますます高まってきている、ということです。

タイでは、最初にスコータイ・タマティラット公開大学 Sukhothai Thammathirat Open University で、タイの大学関係生協の全国セミナーがあり、私と和田専務、学生の佐藤君の三人で、概況と事業内容と学生参加のあり方をそれぞれ報告しました。それについてつぎつぎに質問があり、そのあとのタイの人たちの会議の時間もそのために使われるという事態になりました。

彼らも自分たちの国の議論はいつでもできるので、せっかく日本から来てくださった大学生協の人たちの話を聞こうという雰囲気になり、いろいろな質問にわれわれが応答するという時間になりました。日本語と現地語との通訳に少し不安は残りましたが、日本の大学生協の様子はだいたい伝えられたのではないかと思います。

翌日の国際協同組合同盟アジア太平洋部会 ICA-AP 大学キャンパス生協委員会主催の国際シンポジウムでは、タイの協同組合関係の次官クラスも出席するなか、私が委員長として挨拶したうえで、日本の大学生協についても報告しました。これらはすべて英語で行っ

たのですが、それについてもいろいろな人に質問され、日本の大学生協への関心が高まっていることを感じました。

その後、生協委員会の第1回会議があり、ICA-APからの役員も交代して雰囲気も変わりましたので、リーダーシップを発揮するため私が直接議長を務めたのですが、不慣れもあってうまく行かない面もありました。しかし、だいたいの様子は分かったので、これからはこういう機会を生かして、アジア地域に日本の大学生協の影響を広めていけないかと思っています。

学生の生協と教員の生協

第二に、その次の日にいくつかの大学生協の見学会がありました。

まず Kasetsart University（農業大学）で、生協の店舗を見せてもらい、話を聞きました。タイでは一番古くて歴史のある生協のようで、購買生協とクレジットコープの二つがあり、1950年代の終わりにもともとは学生がつくったということでした。しかしその後、実質的に教員が運営するようになり、悪く言うと教職員が乗っ取ったような形になっています。

「そういう経過をどう見ていたのか」「学生の反対運動はなかったのか」などいろいろ聞いたのですが、その場にいた人たちの話では真相はつかめませんでした。その辺のことを詳しく調べれば、非常に面白いのではないかと思います。

日本の大学生協は学生中心で来ているわけですが、アジアにはそういうふうにはいかないケースが多いようです。とくいわゆるクレジットコープ Credit Coop——日本で言えば農林中金とか労金のようなものでしょうか——は、実質的には教職員主体で、いろいろなところに投資してかなりの利益を上げたりしているようで、生協が金儲けの手段になっている面もあるようです。

そういうあり方でよいのか、いろいろ考えさせられました。そういうことも含めて、今回はタイの例ではいろいろな問題を感じさせられました。

真似をすることの意味

第三に、強行軍だったのですが、その後インドネシアに回り、KOPINDO（インドネシア青年協同組合連合会）主催の大学キャンパス生協セミナーに参加してきました。ジャカルタで行われたこの会議の出席者は、大半が学生たちとのことでしたが、日本語で挨拶したあと、彼らの議論を聞いてきました。日本語と現地語との通訳が不十分で、全容がつかめているかどうか心もとないのですが、一つだけ聞き捨てならないと思い、発言したことがあります。

現地の学生から「なんでマネをする必要があるのか」という意見が出たので、悪い例を真似るのは良いことではないが、良い例ならば真似をするべきなのではないか、という発言をしました。そのために、タルドという社会学者が、「誰かが新しいことを発明すると皆がそれを真似て、良い場合には社会のレベルが上がっていく、社会はそういうふうに変わっていくものなのだ」と言っているという例などを出したかったのですが、通訳が十分でなく、思うようにいきませんでした。

言語の問題ですが、日本語と現地語との通訳だと、多少なりとも専門的なことのわかる良い人がいないことが多いので、不安や不満が残ります。その点、英語との通訳のプロは一般かなり鍛えられていることが多いし、われわれもかなり使えるので、英語でやり取りできる場合には、なるべくそうしたほうが良いように思いました。

このように、コミュニケーションの問題はありますが、お互いに相手の状況を知り合い、日本の大学生協の成果について知らせていく、彼らからも学べることは学んでいくことが大切で、今後とも積極的に交流を進めていかなくはならないと思いました。

3 アジアのなかの大学生協

日本は欧米なのか：あらためて脱米欧入亜の必要性

帰ってきてたまたまテレビを見ていたら、NHK 特集「JAPAN デビュー」の関連で国際世論調査の特集をやっていました。そのなかに「日本はアジアなのか欧米なのか？」という質問があり、私はそういう質問したい考えたことがなかったのでびっくりしました。しかし、この質問を実際に行ってみると、世界の各地で「日本は欧米だ」と思っている人がけっこう多く、しかももっとも多いのは日本なのです。

つまり、地理的なアジアではなくて、先進国と途上国という分類をした場合の途上国とアジアが結びついてしまっていて、日本は先進国だから欧米なのだという認識を持っている人がすごく多いのです。福澤諭吉の「脱亜入欧」を逆転させなければならないと言われてからだいぶ経つはずなのですが、本当の意味での「脱米欧入亜」をどうするのか。大学生協にかぎらない大きな課題ですが、われわれも考えていかなければなりません。大学生協としても、そういう視野をつねにもって活動していかなければならないということでしょう。

外へのまなざしは必ず内へのまなざしにはね返る

そういうことを言いながら、しかし同時に私は、いつも日本の各地で小さいながらも頑張っている生協のことを思い浮かべます。そういう大学生協の立場から見たら、日本の大学生協とは何なのか。アジアの大学生協との連帯とは何なのか。そういう視点もつねに持ち続けなければならないと思います。

そういう意味で、外へのまなざしがそれだけになってしまわないように、つねに内へのまなざしにはね返ってくるように、しなくてはなりません。これも生協だけにかぎらないとは思いますが、具体的に生協活動の実践のさいには、外に視野を広げていけばいくほど、同時にわれわれの内側、困難を抱えながら小さくても頑張っている生協や、それらを含めた全体の連帯の問題があるわけですから、そういう面にもまなざしを注ぎながらこれからの活動を展開していかなくてはなりません。

外へのまなざしはつねに内へのまなざしをとめない、内へのまなざしはまたつねに、外へのまなざしに展開していかなければならないのです。きれい事としてではなく、じっさいに汗まみれになりながら。

以上をもって本日の挨拶とさせていただきます。

(理事会－090725)